

## 現在を撮る



## コロナ禍の「孤立」に向き合う人々

声を掛けながら、慎重に市営住宅の階段を下りる大沢麻輔さん(右)。孤立化しやすい団地の高齢者を日々支えている＝6日午前8時40分、札幌市厚別区



市営住宅の敷地内で見回り先の高齢者と言葉を交わす四つ葉自治会の一戸愛子さん(右)。心を配ってもらえるように粘り強く活動を続けている＝11月28日午前11時35分、札幌市厚別区



セルフネグレクトによりゴミ屋敷となった市営住宅の一室。「独居高齢者の孤立化を防ぐためにはどうすべきか。カメラを手に視察する淑徳大の結城康博教授＝5日午前10時20分、札幌市厚別区



孤立化が進むなかで、みまもられなくなった高齢者の生活。見守るべき高齢者を支援する札幌市の地域福祉推進員(左)＝11月12日午後0時15分、札幌市厚別区



男性が孤独死し、床の一部がはがされた部屋で静かに手を合わせる妹＝11日午後0時30分、札幌市白石区



**誰**にもみとられず自宅で息を引き取る「孤独死」が深刻化している。背景には、新型コロナウイルス感染拡大の影響で人や社会との交流がより希薄化している現状がある。コロナ禍での「孤立」を取り巻く現場に向き合う人たちに迫った。

札幌市厚別区にある青葉町四つ葉自治会の福祉推進委員5人は月1回、市営住宅に住む70歳以上の独居世帯を訪問している。しかし、扉は開かず、インターホンにも応答がないのが大半だ。それでも

5人は粘り強く活動を続けている。

見守られる側の竹通敏子さん(71)はコロナ禍で人付き合いは減ったが、「1人で心細い分、話のできる存在がいるのはありがたい」と頼りにする。同地区の見回り活動に20年近く携わり、推進委員をまとめる四つ葉自治会副会長の一戸愛子さん(75)は「『コロナ疲れ』で人と接点を持ちたがらない人が増え、どう対応すればいいのか…」と心配そうに話す。見守る側の高齢化が進む中、なかなか後任が見つからない現実にも不安を募らせる。

一方で、対面できる強みを生かし、孤独死につながる異変にいち早く気付ける人たちもいる。札幌市厚別区もみじ台にある在宅介護サービス「ゆうづきもみじ」の管理者兼ケアマネジャー大沢麻輔さん(57)。今月6日朝、通所する体の不自由な高齢者に寄り添い、声を掛けながら階段をゆっくりと下りていた。「小規模多機能型居宅介護」と呼ばれる介護サービスは通所や訪問、宿泊を利用者の生活や事情に組み合わせながら自宅に住む高齢者を支える。信頼関係をつくることで、

他者との関わりを避けるセルフネグレクト(自己放任)を防ぐ。孤独死を防ぐ有効な手段として、介護サービスが果たす役割は注目されそうだ。

札幌市白石区で11月中旬、孤独死した男性(61)が発見された。男性の妹(57)は「最後に会えたのは今年のお盆。電話をもっとしておけば良かった…」と悔やんだ。男性に子どもはおらず、コロナ禍で親族との交流は減っていたという。異変を察知できなかったら、近隣住民も安否確認までは思いつかないだろう。

孤独死の現場では、特殊清掃や遺品などを整理する業者も、亡くなった人と向き合いながら作業にあたっている。

孤独死問題に詳しい淑徳大(千葉県)総合福祉学部教授の結城康博(52)は「孤独死を個人の問題ではなく、社会問題として捉える意識改革が必要だ」と話す。家族や地域、友人が担ってきた役割を、公的機関が担うべきだと訴える。「周囲と支え合う意識はもちろん、高齢者自身も『支えられ上手』になることが大切」。

(写真部 大石祐尚)